アーティストインタビュー
澤野正樹さん

—では、澤野さんの幼少期時代から少しずつ年表をさらっていきたいなと思いますので。順番で、そして幼少期、どんなお子さんだったのかお聞かせください。

澤野：はい。私が生まれたのは秋田県の県南の六郷町っていうところで、今、合併して美郷町っていうところになったんですけど、そこで生まれました。家がすんごい古くて。貧乏だったんですね。ボロ屋だなって、家族も言ってたし、そういう認識で、そんなうちで過ごしてました。六郷町って湧き水がすごいきれいなところで。そこで湧き水、清水がもう至る所にあって、家に上水道が通ってなくて、それぞれの家でポンプを持って、自分で水を引き上げて使ってるみたいな、そんな場所でしたね。そんなところで生まれて、中学校の頭かな、まではそこで、中学校、六郷中学校っていうところがあって、そこで過ごしてきました。その中学校の２年生か１年生ぐらいの頃に、両親が離婚して。そこで高校進学。あ、そのあとちょっと、六郷の中でも引っ越したりしていて。そのあと高校進学で、隣の大曲って、今、大仙市ですね。花火が有名な町ですけど。そこに母方の実家があったので、そこに移動して高校時代を過ごしました。一番多感な時期を。その頃に、高校演劇をやってましたね。そんな感じかな。演劇との関わりで言えば、それを関わりっていうのか分からないけれども、幼稚園ぐらいの頃からステージに立つのがすごい好きだったですね。小２ぐらいから和太鼓の道場に入って、団体で子供太鼓フェスティバルだったかな、というのがあって、それで全国で５番目に入ったりとか。個人じゃなくて団体でですけど。そういうところで、なんていうんだろう、演劇をやる楽しさもそうだけど、ライブ的なものの面白さみたいなものを感じながら過ごしてきた子供時代でしたかね。

—お遊戯会ではなにか劇的なものをされたんですか？

澤野：やってました。ダンスとかもやってたりして。あんまりでも、内容覚えてないけど、かぼちゃがどうこうとかっていうセリフがあったのっていうのはなんとなく覚えてるけど（笑）。その程度で。幼稚園の頃に、応援、運動はすごい苦手だったんですけど、応援の、俺の振り付けが面白いつってなんかみんなにま

ねされたことがあって。それがなんか、嫌だったけど、なんとなく覚えてることだったな。そうそう。そうすね。あの頃って何覚えてんのかな。それも作品にしたこともあるんですけど、清水に落ちたことがあって。清水って、すごい広い清水、プール２枚分ぐらいの清水がうちの近くにあって、そこに落ちたんですけど。藻が張ってるんですけど、落ちるとすごい澄み切ってるんですよね、下って。なんかそれをなんとなくずっと覚えてて。それとか山の緑とか。なんかそういうのが原風景としてあって。結構、何かとそういうところに立ち返ることはあるかなと思ったりしてます。

—小学校、中学校、高校と、学生時代の友人関係はどうでしたか？

澤野：友人関係は、中学校まではちっちゃな学区だったので、そのまま繰り上がりな感じで。で、高校から全く別な感じ。中学校時代そういうことがあって、けど、人前には立つ役割にいて目立ってから、高校では目立たないようにしようと思って、結構そこでバツんと分かれている感じですね。立ち振る舞い方とかも。小学校の頃は。中学校で卓球部に入ったんだけど。それもなんか、だから結構あんまり自分で選択してなかったのかもしれない。俺、吹奏楽に入りたかったんだけど。なんかちょっと怖い先輩がいて、中学校の頃。なんつうんだろう、卓球体験しに行って、澤野が入る、まっちゃんが入るんだったら入るみたいな感じになって。そうなのと思って入った記憶（笑）。なんかやっぱ卓球部とか、なんつうの、中学校の頃の部活って、同じような家庭環境のやつとか集まってたと思うんだよね。俺はそうでした。大きいとこじゃないからだと思うんだけど。なんかそういう感じで、そういう中にいながら。だから半分ぐれてるみたいな人もいたし。でもそういう人とも仲良くて、だから分け隔てなく、みんなと仲良くて、そういう人の気持ちも分かるっていう感じでいたのかな。で、仲良かったのは、やっぱそういう人たちだった。

　高校からは、市外の高校に行ったってのもあって、また新しい付き合いをしてたけど。その頃も、その時もだから、演劇部に入ったのも、なんていうの、演劇部ちょっと興味あるからさ、一緒に見に行こうよって言われて、見に行ったら、そいつは放送部に入りやがって（笑）。みんな女子の中に俺１人だけ入るっていう。８人ぐらいの部活だったけど、女性７人の１名男みたいな感じの、弱小演劇部に入っていう感じかな。で、高校の頃の友達は、比較的、なんつうの、ちょっ

とこう、陰キャって言うのかな、今でいうと、っていう人たちとグループにいたけど、高３の頃の学習発表、なんつうんだ、学祭で、演劇部が必ずそこでステージやるんだけど、その時にやった役というか。『バレンタイン撲滅運動体』っていう作品だったんだけど。ネット台本だと思ったかな。それでやった役で、半分演出みたいなこともしてて。その時にやった役が、なんか受けて。澤野才能あるから絶対続けたほういいとか言ってもらったのは、そのあと大学にいってから活動続けるのにもあと押しになったかな。あ、いいんだ。俺。中学校の頃に、澤野は下手だけどなんか観ちゃうみたいなことを先生に言われて、すげえ俺、嫌だった、それ、下手だったと言われたのが。けど、なんかそこで実を結んだ気がして。下手の横好きじゃないけど。それで達成感は若干感じたかな。それでまた友人関係もバッと広がったり。お前面白いなっていう感じになって、運動部の人たちも話すようになったりとか。そんな感じだったかな。

　あと、高校演劇の仲間、ほかの同じ大会の学区でやってた友達で、切磋琢磨してた友人もできて。そのきっかけになったのが、地元の演劇団体が高校生に、高校演劇があるところにお知らせをして、プロデュース公演をした。学生役で出てくれって。それで、自分の学区の大会の区の人たち、各高校から１名、２名出て、そこで仲良くなったり、彼女ができたり、そういうふうなことをやったのも。そこでやっぱり、なんて言うの、いわゆる高校演劇の緞帳があって、行儀良くやって、平台置いて。けど、そうじゃなくて、もっと台組が、そもそも動くように作ったりとか、なんつうんだろな、高校演劇でやってたところから、ちょっとブレクスルーがあって。その２つがあって、そのあとも続けるきっかけになったかなと。で、その頃の、その時に一緒に仲間になった子たちは、今、演劇続けているかどうか分かんない。１人、だからその時付き合った子かな。が、東京で芝居しばらく続けてたけど、今どうなったか分からない。１人は脚本すごい書けるやつで、日大の文学部なのかな。ちょっと細かくは覚えてないけど、に行ったけど、そのあとどうなったかな。小説書いてるって言ってたのが最高かな。みたいな感じかなっていう友人。あと、その最後の舞台で、放送部に入った俺を裏切ったやつを、俺が誘ったら一緒にやるっつって。そこで、なんか、一緒に舞台踏んだのもいい思い出かな。そんな友人関係と、あと演劇に関わることです。

―ミサイルで活動してる中で、たくさんの出会いがあったと思うんですけども。その時かけてもらってうれしかった言葉、今も忘れられない言葉、そういう出会

いだったり言葉だったり、そういう存在の言葉ありますか？

澤野：思い出せばたくさんある。ミサイルの活動、亡くなってしまったけど、一番最初に誇りに思ったのは、青井陽治っていう方がいて、演出者協会にいた方。その人が、たくさん芝居もちろん観てる方で、その年に見たリア王、俺らの審査員来てくれた。俺らの、「その年に観たリア王の中で、トップレベルに面白い」と。トップレベルだと。で、「テンションとエモーションにおいて世界レベルだ」って言ってくれたのは、ずっと、しばらくそれにすがってたな（笑）。やったと思って。その言葉をプロフィールに書いて頑張ってたな。ありがたかった言葉。いろんなことがあるけど、八巻さんに「裸はまだ早い」とか言われたから脱いでた気もするし。そんな感じ。あとね、大河原さん、その時の一緒にやってた、同じ演劇シーンを作ってた仲間として、今もこうやって話しかけてくれること自体、俺はすごいうれしいし。10-BOX しばらく行かなくても、久しぶりって言ってくれるしね。なんか、10-BOX の存在はすごい大きかったですよ。居場所だったから。ずっといたから、俺。そういう場所があって、その人たちが今も活動してるってうのがすごいうれしいし、その人たちの存在がもう俺にとっては、印象深いことかな。言葉はいろいろかけられたと思う。言えばほんどきりがない。範宙遊泳の山本さんとかと、それこそ中屋敷さんとか、同世代の人たちと演劇祭とかで一緒になったりして、中屋敷くんは、俺がミサイル、もっと最初に観てたらミサイル入っちゃうと思うって言ってくれたりとか。山本くんは同い年なはずだな、たしか。本当にすごいと思ったって言ってくれたし、あの作品作る彼らが。俺その時は関西の若手の、〓ケックス 01:31:43〓って、2011 年の〓ケックス〓に出てたの範宙遊泳が。面白い作品作っている人がいるなっていうことだけ覚えてて、その人とミソゲキで一緒になってとか、とにかく、いろんな線がつながってった時期で。同世代の人たちと全国単位でつながった時に、認めてもらえるとか、お互いに面白いって言い合えたのは、俺はすごいそれはうれしかったかな。

大河原：ものすごい熱狂と狂乱の渦の中にいた演劇人って、タンクミさんと澤野ぐらいだろうって僕は思っていて。その中で、澤野はそこからレールから 1 回降りて。今、ちょっと離れたところからでも演劇に携わって生きてはいるという状態だと思うんだけど。ただ、澤野正樹にとって、演劇はなんであるかを聞くより

も、なんだったのかを聞いたほうがいいのか、今考えていて。なんか過去形で聞かないと、失礼な気がしちゃってるんだよね。おかしな話なんだけど。

澤野：今も変わってないかもしれない、それは。どう言ったらいいか分かんないけど、ちょっと俺も初めて言うからあれだけど、今日こうやってゼロから話させてもらって思ったんだけど、突き詰めて。ガンプラ作って、ジオラマ作って、つなぎ目消して塗装してやってるのと一緒で、なんつうの、俺ね、演劇ガツガツやってた時も思ったんだけど、本当に究極的にもう俺がやれる最大限のものって、たぶんあると思ってて。それができたら、俺、死んでもいいって思ってたから。そういうなんていうの、終わりのないものを、俺にとって演劇って何かって。それに終わりがないこともなんとなく分かってて、常に新しい視野が入ってくるから。それも分かってんだけど、ずっとその深淵の中を突き詰めていけるそういう土壌だと。そういうふうなフラットな状況だとすれば、演劇って言葉なのかも分からないしっていうものだなと俺は思っていて。表現っていうのもなんか、飯田茂実は表現っていう言い方を嫌うけど。だから、突き詰めていく対象として、やれることは無限にあるけど、終わりはたぶんないっていうことが分かってる、立ち向かえる相手。ずっと付き合える相手として。かな、相手だなってのは演劇のこと言えるかな。それはたぶん、当時と今も、そんなに変わってない。

大河原：それは何かに置き換わった？　今の、澤野正樹の人生において、本業であったり家族であったり、何かにちゃんと置き換わってるかいっていうのが。

澤野：置き換わってないかもしれない。それは演劇、今、俺がある深淵に半分足突っ込んだものとしては、演劇しかないかも。まだ。